



中村俊定文庫
文庫 18
815





軍戎春



星子杖

秋香菴

鹿苑舍淋山著
秋香菴國村校



斯不歌号一多於無亡師巢兆
自華能日行あさう海士のより表
樵夫若芥曲さく洩るはあをるを
千なり玉むらら軒道寺ふ拵あのみ
且なりゆか魚ふきとやあゆま
歌あさりのの帰あまあて方あふ
強一色あふりしまた知已れあう
懐一もたに同のふ遠うあはれを

あさう居士う在あいのいあしを思あふ
遠くののんを並れぬさ賞うあれ
さくはあもあさふあま風う誘うあ
せあひあさくはりあは眼あふ
蒼を出る雪うりあさくはあ
さあははうあふあさくはあ
ああうれあは本有常位のあ
獨中ふ澄一往周ああ

あゝ〜 惜〜 あり〜 あり〜 せと 殿の
あゝ 後 隈 あり〜 せと あり〜 あり〜 業
あゝ〜 あり〜 あり〜 あり〜 あり〜
名 あり〜 あり〜 あり〜 あり〜 あり〜
あり〜 あり〜 あり〜 あり〜 あり〜
十二 あり〜 あり〜 あり〜 あり〜 あり〜
あり〜 あり〜 あり〜 あり〜 あり〜
あり〜 あり〜 あり〜 あり〜 あり〜

あゝ あり〜 あり〜 あり〜 あり〜 あり〜
拾い あり〜 あり〜 あり〜 あり〜 あり〜
言 あり〜 あり〜 あり〜 あり〜 あり〜
再の あり〜 あり〜 あり〜 あり〜 あり〜

文政丙戌年

出羽國湯岳 沙門 淋山識





茶室

遺稿

獨吟歌仙 半折

古
巢兆

明月一ひさす秋意は實原に
石の面もも旅のこぼれひ
雲の焚杉も不控やと動も
土黒相寄 岬名 志うらみ
相丸太いりよ 掉やうも 氷はあ
中も 旅も 思ふ 旅も 又も

余所のより 破ら 障子 をうたてり
奈様の酒乃 破ら やむせん
今頃は 眞面 障子 此 障子
のころ 田地を 判し 内り 申さ
河つら 遊そ 人も 遊そ 遊そ 秋
弓小箱 おく 大門 若月
住り 旅を 幾つ 障子 秋の 音
深 材 あり 障子 障子 障子
寂し かな 障子 を 風も 小先 入る

百れ足子の初く紫子

花の雪未破り馬ハ瘦みり

昔の此れ新ふゆと痛戴く

次頁

比水の風よ和らく塔は新

流をらんらん包ま籠の壳

こけぬも無くちりけと物程ひ

纏の只然うらとたる体

淋山

燕市

有圭

國村

柵橋もぬきりほり此ふんさ降

十石あやうと麻上卸くふ

噴鳥もや控落しり為免きと

根津の糸は散う川音

秋風の扇を楯を赤吉許染

露を赤まに下敷麻て見ん

澄月此隣にわきく静あま

稀よ杉臭此歩を涼しき

村の名を夢もさうしき古馬屋

柳翠

圭

市

翠

村

市

圭

村

翠

翠此火繩のふり小町はの
 冬川由経中をうきも何もあ
 草拙んやう 露 庭 へ
 雪花子層家此昔語く出さく
 酒中の歌をうきうき 柳
 市 村 翠 市 圭

淋山一 燕市 四 有圭 四
 國村 四 柳翠 四 葦 一

君子千里同風

雪二日續く梅名はあしうね
 幸法師の歌をうきうき 猫の恋
 青柳の処をうきあはは川
 川をうきあはは吉根もあの水
 湯系もあははうきうき 月
 おははは 枝もあははははり
 袖乃雪をうきあはははははは

洛

茂良 金葉 岱李 梅價 笑九 五芳 雪雄

川息の朝霞まごころ啼水翁

蒼虬

下木あゆむはるけき海あそび梅のむ

万和

梅言々〜 柔と涼亭と出て居らぬ

采艸

清らぬ庭に花かす人や夢を月

浅所

おめ〜 弱きり花さすり芒より粉

笛

雪雲は移るお梅も西あのをと

喜齋

あき〜 かくき信〜

手紙め〜 方め

稻は〜 久〜 鏡山

浪花 長齋

燈籠や山の也き幾代あそび
又〜 通か基坊〜 ちけ〜 花

星譜 之津人

老懐

寐覚るも小夜は海を枕上

魯隱

婿〜 にあ〜 ち井れ月あそび

自樂

起〜 や梅もあ〜 海を汲も水

祇杖

言はぬ中〜 上事き〜 菴の用

眉鳳

ち然るも〜 ち〜 顔〜 ちあ

井左

ち折言もあ〜 ち〜 ち〜 ち〜

若助

何ふ物もあやふさはる新義
け堤ふか食積るもあやふの粉
白鳥姑よりかえりー浪乃を
甚表ふ道は皆成るれや世の裏
筆此入ら男をぬり世を若菜
しくくや大小名は数曲端
きくにえきく刈りり 枯尾花
秋のりき似る新義ー系は露
まらーや泡ぬくほれ胡やと

井眉
百堂
公路
屋烏
奇測
省吾
路白
六車
椿堂

伊勢

五月陸中寒

都公世世れおいは降ーし
まごりやまも新無豆海ー
骨少し二人のあらそそきあそり
かんふる根もまめしあくとあがり
美ーや門と吹きの葉大根
根つみと上もつりて木下園
紫着柳を結句涼ーまを浦か
旅と物もくくすあれを新扇

梅間
不轉
我竟
岳輜
塊翁
木天
足彦
少汝

名古屋

因一經手を山系れ萬を祀

月底

嗟う如樹も大なるく山にく

三河 卓池

近くや世一萬飯笑も世

秋拳

破海老の死を日すく秋の風

梅老

を解やめはる紅糸傳傳と此

木芽

朝うわや我も控へ糸人名敷

甲斐 有斐

空也の下は善男子を舞と

佛子子此雙もはるぬ瓢の如

嵐外

持たすのこころてえくす柳う程

蟹守

こわくくと一柳もあて柳の流

重行

大風吹きもすり勢すや露は袋

百二

夕暮を吹く申仕舞如ゆりも

才馬

白き此もあつと無病の言の柳

一作

我老を空も知らぬく冬は月

漫々

串途の四沙汰も知らず青も簾

伊豆 一瓢

惟子れめくくはあや神也柳

有鱗

言の事も又事也とと柳の雨

相模 方解

面白くもあももり山の冬

堆塚

人き庵か門遠く秋の音

江戸

成美

静かなる中流に流るる

松夫

はるくちや浅き雨に濡れ

浙江

みちを去る月のまよひ

まのまにけうきふを別次平助

太節

昭十方刹

古くは伊豆大洞きり帯

黙齋

静かなる中流に流るる

碓合

あつたきとあとりふつと

秋耳

押さひもめ魚をたは戸口

何丸

一篇の牡丹花の散り

蕉雨

静かなる中流に流るる

玉光

芒れとる中流に流るる

久藏

静かなる中流に流るる

鶯笠

心非

心非

小坊まれば鶴の足

荷乙

静かなる中流に流るる

車両

ふ二の山をまをさるる

孤山

水傍の草を舞く花の田に
鴨もや田川よゆきふの音
五五田の丘隅持より蓮の紙
田植頃うい〜〜や呼吸の音

草菴

白髪はく髪もあけお煙はき
父母は先ず〜〜より更衣
辻番の草花を吹や小半を
水の泡は舞をまきお花をき

障あ〜〜小豆は〜や多から雨
る障やあ〜〜草は〜
き〜〜や白〜〜は〜
さ〜〜遠〜〜列〜〜
柳〜〜や草〜〜如丘のほ〜
祖白もや雀横切ふ笠の上
谷うけや空を〜〜几中
皂角は〜〜み〜〜雪の枝
元形〜〜懸揚〜〜やさ〜

鞠塙

其樂

九朴

春葺

一峨

氷靴

應

碩齋

對山

仙骨

諫團

春樹

護物

柏舟

寥松

芝山

屠龍

近傳の釋氏と請法延

淋—きんは是をけりてきんは
名を坊へて世に経る梅也秋の風
跡も也心から懐をき書述子
住吉も存ありてかきつる
小田系は袂の中を吹もその船
静さなりし仙のうらた寺の系
きんも也四五り居れ昔も
経るも也やね風をきりて獨旅

旭波
归来
梅仁
南井
逸帆
之
珍齋
東甫

凌—きんは是をけりてきんは
更衣破中の樂も神の徳も
春あつて静るは後のさうり
曉の眼の移り余りやん我
静るも也と記しよきやうもは風

波濤
邦子
其阿
兔林
無染

和調亭殘菊會 三

山影や朽木に倚りて跡も菊
跡も也日影もももももももも
白牡丹もももももももももももも

即梅
白圭
東子

朝のやぶらぎを結の毛濡せし
灌仰よ糸草を物おまき
吹流す珠露も秋露や野の
数あまは方々淋しと指す
さうさう草花掃金糸巻の那

うた歌

夕暮れ空もかきりー秋空
澄りきりー平あねや空 雲

月山よのりし時

芭蕉屋の空をよそをて秋の立
暮れ夜半の夜半もつゆは
みれば月暈の中ー物乃言
芦の穂や笠屋ー踏る月は秋
こり月を清くしよあけぬや枯屋を
己うたれ雲をさうあふそその那
虫岡子相もた入ら方小雨かふ
るの直くふらよすれくかー
拜殿よ言わすは目し何うか

語竹

山朝

中月

野遊

夫山

鯉夫

子行

如竹

洗志

青涼

日照

呂律

三千雄

遠菴

楽只

露月

落舟の楳小旭姑あつるさうり

青牛

日何きらと舟居付く白紙衣のな

如弓

雷陣於木氏何素予の庵中を

訪ひての楳抄

昔あめくきと道却りて却ればあ

國村

持ちたら次種も暮れ夕の柳

五樓

寺姑あも訪ひ新居にて庵をり

金河

村のあま小なる寺姑はよの務

中茂

昔ねる寺小り思や存の春

玄来

我の筆くく似く筆の暮る柳小

葛二

梓や赤巫女姑も強きおもふ

二柳

川星ら次るあや夜更の夜の舟

梅之

一毛あつる暮虫風も吹きさうり

李喬

松風けうつらき吹やあ楓

玲眠

潮来沼睡堂

秋をくくさる流の上はくくも山

花曉

くさくさ芳里同少のる暮れ山

唇兆

雜草のら暖我の富れあひか

芳七

夕飯の言ももちふ一葉ありて

可良

錦白や伊勢のうらも一葉ありて

李川

秋の言と送るねらに

きりくほせや花の河一も毎

五渡

花とあつと水何そあそびを帯し

除松

霧の御滝の柳水あつとくさり

氷佳

遠火あつとちくく五渡流の柳

邑子

も風や柳をゆきふ浪せき

素頂

虫のうらみり心きくばや青い

たふ

門先の暮くくつれく本は青い

耕齋

在岬の廣くく文と塔乃あ

芝堂

山居

くあつれ遠くあつて夜も独り

安房

杉長

あつれもは秋くくそそ一葉あり

上總

耶賀

さやあつとくくあきさのり

省我

槐里

もかんをほやほあや人あつと

下總

素迪

山影やあつとあつと梅の朝

至長

さやあつとくくあきさのり

至長

孤立集著

梅のそとに秋の氣のぬれもあがり
まの風は梅の香を移して山家
昔は秋の松葉をわけてよの月
浦島もいりて行くせん後若くは
茶もよそと月を心とめしり
柝のうゝ下吹かぬ夜に那
床下にもあめも水鶴もあがり
まの風はまの枯れもあがり

李峰
如柝
桂丸
蒼峨
茶彦
夜哭
普記
北尼

押身一日おふくくく月の
持よりくき梅のそとに山家
まの風や眼をよめてあがり
田舎の上は秋の香を細代の
切梅もあがり月を
一叶のうゝくき日暮る梅のそ
竹まき戸に釘はけもあがり
まの根もあがり
まの葉もあがり

廣陵
雨塘
去雲
竹加
李尺
松江
渾堂
輅齊
左裏

は風や霧やあさるやせん

近江

鳥頂

寛永寺也

雨得て一花よこれるに洋山寺

可盈

きくよと物もきき花の上

千影

戸のききし花はつらに月夜介

きく女

さし花くまもあふを猫のま

春権

啼きしらぬさうを待きんり

文常

新りあふお国はる垣根のか

于常

はうら水鏡を失く消るるを

儲央

飛驒

集りて一喜一悲を我小田はる

善光寺

州司

わつちをくくしてから梅を待きり

汝蘭

きこりるもかろぬ麻起る家

杜厚

埜地や乾るるは田今空

呂吹

夫もはやまけつらきも梅のあ

可厚

観蓮

月夜ゆきをききあや蓮の花

素檠

あつと田一吐もや吹かんさる

雲帯

はあけあふや花もかこら州

如毛

日影さくくんのすゝめく成まきり
桐花のまゆと洩るし月の大るりか
水子月を吹く切あまを掌は松
吾も住をす何ぞ解する門の重
日虫入のちうり石を二れ九月か
遠里の杉と霞は霧のゆ
晴立や吾もうし海向人乃門
あつしや雉子二又は小哈
沢蟹は嬉し歌ふる雪解は

若人

微帝

武日

一系

月鴻

采室

玄く

壺半

阿兮

上毛

白くくたに癖も竹のよまは重
山吹の扇れを笛の井も標の斗
枯くまふくことあはあまか
吾鴨を早くまきやゆり花
星流を水鏡し知らぬ月夜に
那のふみきやうあは周より入
那のまふまきや此を抱きまき
豆敷めし不れ方くそそのふ
四阿あむ晴りのや台歌のま

茅磨

車隣

紅碩

廉太

雄尾

和井

官鯉

麦茂

あまら

下毛

十九

初月より風も持るや 帘

吳芥

静かなる日よ物もなれく秋の聲

浅見

五葉のついでに〜〜〜月の名

凡鳥

雨名も同や昔を越え行く水

素考

小畠も持る中清も如流も所

星谷

おきりあ〜〜〜冬名山

北成

本道寺滞留

霧知らぬ思ふに世を物も〜〜

仙台

百非

十はつとも梅も消はむちり心

日人

孫持るより居たりあや東山

玄圃

沃深から之隅も昔〜〜

二品

昔は〜〜我影印〜〜

月哉

以中〜〜〜人淋〜〜

鬼瓶

裸〜〜砂川〜〜

士由

〜〜〜母〜〜

青良

雲〜〜〜中〜〜

志柳

旅〜〜〜心〜〜

東磨

席〜〜〜枝〜〜

世竹

川骨や水と流す日は昔
 短秋の月や何ら〜井の邊
 坂の知らぬ菴や猶も月さす
 揚灯の傍へく門をさすの那
 玄猫は傍へくもまぬ金さす
 狐さすも糸此の傍も風乃林
 菊〜ちりて咲く是もさす秋の
 露の旁にやとや月をさすの麻

馬年
 柗村
 江三
 路人
 雄測
 きよ女
 継女
 亀丸

羽黒山禰定

清〜〜〜病を知らぬ南谷
 麻は〜〜極井の糸は静か
 蓮一葉も浮や嬉〜〜の敷
 老〜〜と里の本のやとさるり
 夢や二人〜〜押裏の口
 一日〜〜く二りは秋乃心

醒齋
 十竹
 乙二
 伊達
 冥々
 五陵
 芳齋

有知思

風踏〜〜南よむ〜〜野云
 白露〜〜初〜〜

与人
 多女

曙をさぐれー海をらぬおぼろ

小なる雪より春風はぬや 畠 草の露

多岐の戸や霧がぬくぬけのまき

け 秋をさぐるはやー天の川

隠きぬれぬも落ー松葉の

まをさぐる能く産む秋作の本

よつねより風を吹かす揚ひま

む 芒菊は風を雪ーなる

風や霧よりぬきぬく言はる

雨考

うつと

仙彦

撫淵

夢南

南鶴

紫山

松人

竹二

鶴を産根おけりーお月晴

眼を鼻より三月まきや梅柳

白川やゆたおのむんくさる

独りぬきぬりるまきを白ゆん

深うちをさぐるは足ぬつー

市中を放るよりけ月又の輪

曙をさぐるをさぐりる山

竹をさぐるはやまきぬ紙衣小

大刀持をぬかぬきりぬきま

帆中

俳仏

朴齋

嵐叟

路柱

鬼風

湖秋

如髮

月歩

會津

相馬

三春

秋あらしやいしきくよ数かふ

阜雄

我ら菴然ちちちち月

双竹

まれば戸や空うさうぬ氷さほ

楚雀

あらしから雪の吹く時秋の山

馬令

あまのたのしみもそそく月夜に

左城

灯火やあきも涼き物の数

卓呂

文政乙酉五月十二日没

そのれや実杖もあきく

南部
平角

ねのちもまよふ時あき

楚山

雅なものと夫いふ時

うか〜お世をゆく夢中

五松

雀等れ言を管通す二月

寛兆

さよふ三月あきぬはまも

蘭溪

月のあふきも時を啼く

彦貫

年終り休あき〜まよふ者

淡水

江の鳴よあきれく惜〜宿時

子龍

玉川のあはれの秋花夜

淇水

何れやら〜さきほぬ〜秋

北淇

我う物くまに御しそり蟻の家
足くくちやとちく向きも葉は露

六首美
汎兮

漢まきりい寺に洞をとききく

不きりくくまのまきおまむねのふ

谷雄

まきりくハに新くしりる露まきり

南兮

白牡丹新きり藤末の成ゆり

英里

まきりまきり藤の何きりくま小まきり

春岱

まきり長岡樹も撰まの海ふ夕

聿修

坂ま火やまきりくま信下藤入

百歳

風新まきり月新まきりくま細代守

松澤

おやまきりま日枝の風や新まきり

千秋

風若果新まきりくままきりくま

白鵬

七曲まきりくまきりくま清くま

文里

湖へまきりくまきりくまきりくま

蝶巢

水まきりくまきりくまきりくま

錦水

まきりくまきりくまきりくま

机月

まきりくまきりくまきりくま

吐月

仕合新まきりくまきりくま

如水

翠峯を寺見の橋や土葎
序をくさす噓をくさす木下葎

直峯
白鳩

獨居

嵐啼夜も似金一や炭の屑

箱籠
布席

蓬菜の供もももかうかんたも

弘前
玉之

明月や人を足る申居る都多

秋田
御風

却て空をねねぬ工夫の花のふ

五瓢

夕顔のむすむ出志度うあ梨

野松

揺るるい後若世をすみた川

巴陵

縮緬を頼るも作らやおま目

古翠

明あふ夜川海ふや家此口

咫雲

云半れ重く思ふやせふ婦く

石嶺

草如戸も信之とくや紫苑咲

素岑

雪乃まゝ樹持ぬれ隣りの如

槇露

我も若くもくおれとくゆふ若

柗

燈のたけ玉は月影や梅のむ

し負

月さすや梅えさる申序の歌

其山

夏冷よまきふとる秋のきりりす

宇喬

降る此雨も追ふは芒草那
新多結ひか城子子たあ履
子に吾一人の白り五形あり
洗子ゆり人無法く年の書
野立や山く書を押る事家
一卜毎冬町中へ出る清水の舟
吹風此足えそ也侍早苗川
以とるく指書相一葉
冬此梅折角雪さり喜れり

乙塙 不材 桃語 杜園 淇竹 麗岑 凌洲 太橋 稻丸

湯殿山籠

活られぬ方子人形年々
心より一卜夜降るり寒雨

旅窓病中

鶏待を力に冬寒表を語る
まもるや歳日忘れ一程航
雨乞り一卜立るり雲の峰
世所ら一や夕侍く本爪の毛曇
新戸出を爪の白いや市中

左洲 省海 龜年 瑞元 文阿 素風 舎月

最上行人

持き給子冬月清きつひさ
津美し人あも逢や着き
人あも逢は深立以若温樂小
さくく笑人もあもあり上は山
旅人の望りた夢の卯月ふ
酒筵舎や知り人あも逢夕日秋
杉水く秋もあもありくは
番り子れ寐顔すくは若風
年つづく秋もあもありくは

守月
玄く
一湖
壽山
其行
素山
思山
嗽石
楓二

世を願ふくくはあもありくは
世は隔り垣根をくくは中
琴の音の風もあもありくは
ま柳よがくくは風若情あり
初雪や控ふあもあり 溜の炭
鴻鷹下女の喉もあもあり
日さくくは松の下あもあり 楳嶺
ま柳よ隠りくくは定名 嶺の那
かか笑殿の若き若の戸あもあり

二丘
此由
塗山
吐雲
稻舟
此流
如雪
柳笑
境水

争ぢれ隣の妻さういふおれは
家のもま〜伸ふ隣了縁
る士共能唄きさうや揚ぶらる
畑おのなとまを〜馬山
引もや水も後〜鴨水
あら〜あ〜口ひきう福〜糸の秋
妻さうきさうま〜か〜牡君
須弥山の形を志ら〜ま〜

巢北佛の追福を

蓮
有井
艸雨
桑雨
平車
以后
稻洲
泰に

いさや〜思ふの夜

海〜夜麻のうた〜知ら〜麻の

淋山

室上川舟中

山木の落つ〜空や土 葦
こから〜れ中を〜りあり 角大
ま 鷹の 木州のし 出さうとさう
山を 能 跡 ぬ け ち 乃 ち 彦 乃
橋を せし 雲の や ち ち ち ち ち
夕陽 けい けい けい けい けい

加賀 箕青
越中 雪丸
越後 乾夫
石海
丹波 幽蘭
武陵

蕪々事ぬく窟むや背戸の上
初菘もと物もや小菘能於政
柳野若小四門赤し今於の秋
おとつるや鴉子少幼や多於菘

鬼洞
三津

但馬

出雲

吉備

嵐一万

七浦毛掃や千と留れ煤埃
雲むりやあけり一程もたれ
板くられ世もれ能くあや多
山里を痛く同若多き月夜は

安藝
玄陸

阿波
筵央

鳥老

阿波
鷗里

又々物もあし種々秋若多し那
千もふし付く事もあし多し那
系れ若もあし種々日より風蓋
百合きくしに力余りてと若多し那
節日れ目よりけし免に揚望り
柴船子系もあし種々初し那
う海もあし種々泊り船

筑前
四軒

長崎
仙芝

肥後
仙斧

三考

日向
嚴冬

薩摩
真彦

琴洲

文居

三つ三つ七草明き梅の花

オク
且々

麻栲る一尺道舟や伝主摺
老多ちを著る跡始法るか
去れ山今一得心さか多うと
是やとに根もあきむ紙数様
帚末子似く本隠す後の月
世世切のきふふあきき秋の音
物影と一ッよ入るや月の茶
眼のきあきき淋しき念ふ
涼一やと云やあうく瓢箪か

竹邦

淋山

信濃 永木

京 夙也

兵庫 桐栖

相摸 洞と

遠江 順齊

近江 采佛

春躬

獨妙禪師の粉挽歌とよき

大津よそり高良金尊の月影か
尻弱りや海や室も池の芥
裏白れうらふ月も赤室か
秋の田れ刈わと河ふも寺の蘇
我秋のやうり桂枝日初の由
まき室より藤四五り始末は青少
初堂や馬も出ま子れ藁乃丈
玉味骨のまつきてやう五月の

尾張

東陽

武蔵

へく磨

詠帰

碩布

梅香

白児

賤子

野蝶

園屋の里

よみの海

蓮咲や清堂免くらまき新らき

三巴

花より世を逃く宴此入念佛をか

一雨

外石若くとも己をん酒をや

春嵐

山くく姑鴨舟進まそ梅を

青花

非酒おろすしゆと呼ぶる松葉爪

豆箕

思ふやうふあしをまきく磨り

麦花

まゆやまはあなうしの糸ゆき

観里

濱風の鼻子ゆき海や谷の梅

鯉隠

さへ波子とまねれり汁の和布介

燕市

陽炎や云霧か昏ふ都人

葉蛾

美し起うら吹かへすも此風

琴女

待をやち帯ゆき暮るり春の風

まきめ

昨老ぬき静るるるる柳を

菜山

葦少くもあはれくちく小ま

廬山

秋風枯灯も消えそ春柳ちか

軽雨

咲くく小眼もまつものを枇杷の葉

稻波

まより受えたるくちかきゆり

歡水

黎明

梅を〜上世に梅を満く〜元
待つる夜や世の中も物のなる
段立を寺侍り山寺を〜
うか〜〜日暮あり梅のむ
株よみ呼ぶ〜は月あるな
多此言の世別〜多ある望れ
涼〜〜おりの〜なる王浪乃言
眠る同〜暮る〜出合小斗かか

蒲生

梅枝
青楓
桃牛
自來
陌杏
秋月
北林
柳翠

鷹狩や有明月は憐〜
指非能嘲す我や花は〜
新起の笑顔なり梅のむ
時を〜〜松の〜〜に〜
〜〜〜〜落つ〜里は〜
〜〜〜〜水鷲川〜
〜上への〜
〜とある〜を箱の紙

菁莪
醉夢
文虹
始一
東里
有圭
国村

